

【個人研究】

## 辞書にみる人間科学(2) —国語辞書編—

堀口 久五郎\*

“Human Science” in the dictionary (2): Japanese language dictionaries

Kyugoro HORIGUCHI

The purpose of this study was to indicate how “human science” is described in Japanese language dictionaries based on search results using the National Diet Library Online.

There were five descriptions of human science in Japanese language dictionaries in the National Diet Library Tokyo Pavilion.

This paper examines how human science is positioned based on the characteristics of its descriptions in Japanese language dictionaries, such as the relationship between human science and humanities. Human science became popular and established in Japan after the 1970s. Descriptions of human science in Japanese language dictionaries indicate how human science is accepted and well-established in Japan.

Key words : Japanese language dictionaries, human science, human sciences, science of men, humanities, description

国語辞書, 人間科学, 人間諸科学, 人文(科)学, 記述

### I. はじめに

本稿の目的は、国語辞書の中で立項される人間科学の記述を紹介することである。ただし、本論では、他の分野別(表1)<sup>1)</sup>の専門語辞書類とは異なる国語辞書がもつ歴史や種類、記述内容等を考慮し、国語辞書の特性との関連の検討からその記述の位置づけを行う。

本論が対象とする国語辞書の見出し項目における人間科学は、国語辞書が一般に対象とする「国語項目」ではなく、百科事典や専門語辞書で立項される「百科項目」である。「科学」の語は1893(明治26)年の『日本大辞書』(山田美沙編)の中で立項されているが<sup>2)</sup>、国語辞書において、「自然科学」

の語は明治後半期以降の新語として<sup>3)</sup>、また「社会科学」の語は大正初期以降の新語として立項されるようになり<sup>4)</sup>、「人間科学」は1980年代以降に新語として採録された用語である。新語について、加茂(1955)は、「新しく現われた、又は従来からある事物や概念に対し、これを新しく言い表わすために造られ、又は新しい意義が与えられた語」<sup>5)</sup>と定義し、楳垣(1956)は、「一定の時期を中心として、一定の社会のなかで、その時までに使われなかったことばが使われ始めるようになったもの」<sup>6)</sup>としており、「固有名詞は原則として除く」<sup>7)</sup>とされる(日本国語学会2018)。

新語として国語辞書に採録されることにより、その用語は「社会的に認知された語という位置づけを得たと解され」<sup>8)</sup>ることにもなるが、その語

\* ほりぐち きゅうごろう 文教大学人間科学部人間科学科

表1 人間科学を立項する辞書の記述(分野別)

| 辞書の種類 | 1950～ | 1960～ | 1970～ | 1980～ | 1990～ | 2000～ | 2010～ | 合計     |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 哲学・思想 | 1     |       | 2     | 1     |       |       |       | 4      |
| 社会学   | 1     | 1     | 2     | 2     | 2 (1) |       |       | 8 (1)  |
| 教育学   |       |       | 1     |       | 1     | 1 (1) |       | 3 (1)  |
| 社会福祉学 |       |       |       |       | 1     | 1     | 1     | 3      |
| 看護学   |       |       |       |       |       | 1     | 1     | 2      |
| 国語辞書  |       |       |       | 2     | 1     | 1 (1) | 1 (1) | 5 (2)  |
| 百科事典  | 1     |       | 1     | 2     |       |       |       | 4      |
| その他   |       |       |       | 1     | 1     | 1     |       | 3      |
| 計     | 3     | 1     | 6     | 8     | 6 (1) | 5 (2) | 3 (1) | 32 (4) |

※ 国会図書館東京本館所蔵(2018年3月時)辞書(辞典・事典・用語集等)の調査結果(翻訳書除く)

※ 表の数値は、初めて人間科学の項目が当該辞書において記述された文章(語釈)の数を示す

※ ( )内の数値は、前版からの改訂により文章が修正・加筆されたもの

※ 辞書の種類及び分野(専門分野)とは、辞書の題名により区分したもの

※ 社会学(8)には、社会科学(1)を含む

がもつ固有の意味や専門語としての記述と、現実の社会で使用される中で生じる新たな慣用としての記述との間に相違が生じることがある。そうした社会における言葉の変化に対応する国語辞書が持つ機能について、見坊(1961)は、「言葉の規範を示す」側面と「言葉の状況を客観的にうつし出す」側面があるとして<sup>9)</sup>、辞書編纂のあり方により、「規範」的態度と「記述」的態度の比重や両者の調和等は異なるとしている<sup>10)</sup>。

辞書の記述は常に正確さと規範性が求められるため、文献・資料等で引用等がみられるだけでなく、その記載内容に誤りがあると、マスコミ等で話題になることがある。しかし、本論では、前回(堀口2019)述べたように、人間科学の記述・説明についての適否ではなく、国語辞書に人間科学が立項される事実注目し、その具体的記述を紹介する。専門用語の概念規定にみられる規範的側面のみならず、人間科学がわが国でどのように受容され、定着しているのかという新たな慣用を含む言葉の実態を捉えた記述的側面を把握する上で<sup>11)</sup>、国語辞書の記述はそのことを最もよく反映する事例の一つとして位置付けられる。

本論では、「見出し項目(見出し語)+語釈」という国語辞書の基本的枠組<sup>12)</sup>に基づき人間科学の記述を紹介する。語釈は、定義・語義・意味・解釈等と呼ばれることもあるが<sup>13)</sup>、本論における「語釈」とは、国語辞書における見出し項目(以下、「項目」とする)の解説部を指し、それを具体的に説明する文章を意味する。

## Ⅱ. 国語辞書における人間科学

### 1. 広辞苑の記述

表1のように、国語辞書で収載される人間科学の文章は5つある。国語辞書で人間科学の語をはじめて立項したのは、1983年の『広辞苑』第3版である。戦前の『辞苑』を大幅に改訂し、1955年に刊行された『広辞苑』は、第7版(2018)に至るまで7度の改訂が行われたが、人間科学の語釈は第3版から第4版(1991)、第5版(1998)までの約25年間同じ文章であった。そこでは、21字(句読点含む、以下同じ)の短い字数で人間科学をきわめて簡潔に説明している。

人間科学(新村出編『広辞苑』岩波書店)

第3版(1983:1849)第4版,(1991:1972),

第5版(1998:2049)

広い意味で人間の事象を取り扱う科学の総称。

第6版(2008:2153)

(human sciences) 広い意味で人間の事象を取り扱う科学の総称。狭義には人文科学とほぼ同義だが、現代では社会科学に加え精神医学や動物行動学などを含む包括的な学問領域を指す。

第7版(2018:2243)

(human sciences) 広い意味で人間の事象を取り扱う科学の総称。狭義には人文科学とほぼ同義だが、現代では社会科学に加え精神医学や

動物行動学などを含む、人間に関する包括的な学問領域を指す。

上記のように、5版刊行から10年後の改訂にあたる第6版(2008)では、人間科学の英語対訳語“human sciences”が記載されるとともに、新たに傍線部(54字)が付加された。さらに第7版(2018)では、前版の文章に若干の変更(傍線部)が行われている。

## 2. 大辞林の記述

『広辞苑』(第3版1983)に続き、現代の代表的な中型国語辞書の一つとして知られる『大辞林』初版(1988)においても人間科学が立項された。『大辞林』はその後3度改訂されているが、人間科学については初版の文章がそのまま掲載されている。

人間科学(松村明編『大辞林』三省堂)

初版(1988:1858), 第2版(1995:1943), 第3版(2006:1943), 第4版(2019:2095)

広く人間にかかわる諸事象を研究する学問の総称。言語学・精神医学・人類学などの急速な発展に伴って用いられるようになった語。

『大辞林』(初版)刊行後の1990年代にその発行先の三省堂では、『大辞林』を基にハンディ化した「辞林」を表題に用いた種類の異なる複数の辞書を刊行している。そのうち、次の国語辞書3種<sup>14)</sup>と百科語辞典1種<sup>15)</sup>(すべて三省堂編修所編)において人間科学を立項するが、すべて『大辞林』に収録された語釈と同じ文章である。

『新明解百科語辞典』1991年<sup>15)</sup>

『辞林21』1993年

『ハイブリッド新辞林』1998年

『新辞林』1999年

## 3. 大辞泉の記述

1995年に刊行された『大辞泉』(第1版)は、『広辞苑』、『大辞林』と同規模の中型国語辞書であり、そこでも人間科学が立項されている。第2版やデジタル版<sup>16)</sup>においても人間科学の語釈は1版と同じであり、31字の短い字数で記述している。

人間科学(松村明監『大辞泉』小学館)

第1版(1995:2037)増補・新装版(1998:2037)

第2版(2012:2773)<sup>17)</sup>

人間にかかわる諸事象を総合的に研究しようとする経験科学の総称。

『大辞泉』を刊行した小学館からは、戦後唯一の大型国語辞書であり収録項目数が最多を誇る『日本国語大辞典』(初版,全20巻,1972~76)が刊行されている。その第2版(全13巻別巻1,2000~2002)で新たに人間科学を立項したが、『大辞泉』と同じ文章を収録する。

## Ⅲ. 人間科学を立項する国語辞書の基本的特性

### 1. 発行先

人間科学を採録した国語辞書とそこで記述される文章をみると、異なる題名の辞書であっても発行先が同じ場合は、全く同じ文章を収載していることがわかる。出版社別に国語辞書において立項された人間科学の文章をみると、表2のように、3系統に区分できる。

表2 出版社別にみた人間科学を立項する国語辞書の記述

|      |  |
|------|--|
| 岩波書店 | ： 『広辞苑』3版(1983), 4版(1995), 5版(1998) → 6版(2008) → 7版(2018)  |
| 三省堂  | ： 『大辞林』初版(1988), 2版(1995), 3版(2006), 4版(2019)<br>『辞林21』(1993)14), 『ハイブリッド新辞林』(1998), 『新辞林』(1999) |
| 小学館  | ： 『大辞泉』1版(1995), 増補・新装版(1998), 2版(2012)<br>『日本国語大辞典』2版(2001), 『精選版日本国語大辞典』(2006)                 |

※ 各出版社が発行した右記の辞書における人間科学の文章が、全て同一であることを示す

※ 矢印(→)は、文章の一部が変更されたことを示す

## 2. 収録項目数からみた辞書の種類

国語辞書は、多巻・分冊刊行や大型・中型版、大字版、小型版、携帯版、文庫版、電子版等の多様な形態がある。『大辞林』(初版)等の編纂に関与した倉島(2002)は、現代の国語辞書をその見出し項目数から中型国語辞典、準中型国語辞典、小型国語辞典の3グループに区分している<sup>18)</sup>。本論では、原田編(1971)、倉島(2002)、沖森(2008)、国立国語研究所(2009)等の分類を参照し、電子辞書<sup>16)</sup>を除く戦後に刊行された現代の国語辞書に限定して、その収載する見出し項目数を基準に次の4つに区分する<sup>19)</sup>。

- ①大型国語辞書：40万項目以上
- ②中型国語辞書：20万以上40万項目未満
- ③準中型国語辞書：10万以上20万項目未満
- ④小型国語辞書：10万項目以下

戦後刊行された大型国語辞書は1種類(『日本国語大辞典』)、中型国語辞書は5種類である(表2)。1980年代以降にあらわれた人間科学を立項する『広辞苑』(第3版1983, 約21万語)、『大辞林』(初版1988, 約23万語)、『大辞泉』(初版1995, 約22万語)は、中型国語辞書5種中の3種である。また、大型国語辞書の『日本国語大辞典』(第2版2000～2002, 約50万語)及び上記3種の準中型国語辞書(『辞林21』、『ハイブリッド新辞林』、『新辞林』、各約15万語)を含めると、人間科学を立項する国語辞書はすべて項目数15万程を超える比較的大規模な中型・大型国語辞書であることがわかる。

一般に、中型・大型国語辞書の規模になると、現代語や古語等の「国語項目」だけでなく、固有名詞や専門語・術語等の「百科項目」を載せた総合辞書の特質をもつことがしられている。例えば『広辞苑』(初版1955)では、「凡例」の冒頭におかれた「編集の方針」の中で、「国語辞典にして、また各種専門辞典・百科辞典の効用を兼ねしめる意図の下に編修した中辞典である」<sup>20)</sup>として、「国語辞典」兼「百科事典」の基本方針をその後も堅持しており、戦後の中型・大型国語辞書(6種)すべてがそれと同様の編集方針をとっている。

項目数10万以下の小型国語辞書においても百科項目を収録する例がないわけではないが、一般に小型国語辞書は、国語項目中心であるかそれに

限定されることが殆どであり、これまで刊行された小型国語辞書の中で人間科学を立項する例はみられない。

## 3. 項目の字数

国語辞書は利用者、編集者、出版社、研究者等の各立場から多様な目的があるが<sup>21)</sup>、その基本的特性として、「一定の収録語数を確保するために最小限の分量で説明を行う」(国立国語研究所2009)<sup>22)</sup>ことから、簡潔にして要を得た説明を目指す点が挙げられる。国語項目だけでなく百科項目の語釈についても、専門語辞書や百科事典程のスペースを確保できないため、限られた字数の範囲内でまとめなければならないという制約の中で記述される点に留意する必要がある。

松井(2002)によれば、『広辞苑』、『大辞林』、『大辞泉』等の中型国語辞書における1項目の平均字数は60～70字の間、大型国語辞書の『日本国語大辞典』初版は約150字、第2版は約180字であるという<sup>23)</sup>。

人間科学の5つの文章(『広辞苑』《第3版:21字, 第6版:75字, 第7版82字》、『大辞林』《60字》、『大辞泉』《31字》)の平均字数は53.8字であり、中型国語辞書における平均字数の半分程度の文章もあるが、ほぼ同様の傾向がみられる。

## 4. 執筆担当者

国語辞書の特性として、各項目の執筆者名が記載されない点も挙げられる。表1の百科事典では人間科学の項目の執筆者名は全事典で明記されているが、国語辞書はその項目全てに執筆者名の記載はみられない。『広辞苑』の初版から第2版補訂版までは巻末に「協力者」名一覧があり、それが語釈の執筆者であるのか項目の選定協力者なのか不明であった。しかし、第3版から「執筆・校閲」者と変更され、その巻末では専門分野別に167名が新語等の増補項目の記述・校閲に関与したことが明記された。その中には、題名(タイトルもしくはサブタイトル、シリーズ名を除く。以下、同じ)に「人間の科学」を用いた戦後3番目の論文(国会図書館オンライン及び国会図書館サーチによる「雑誌記事」2019年9月検索結果)の著者である鎮

目恭夫(1958,1971)らの名もみられる<sup>24)</sup>。

三省堂国語辞書の編纂等に従事する飯間(2013)は、国語項目中心の小型国語辞書の執筆は編集委員が行うのに対して、中型・大型国語辞書における百科項目の執筆・校閲等は専門家に依頼するシステムをとると述べている。『大辞泉』(第1版)では、「国語・漢字」101名、「人文・社会科学」84名、「自然科学・科学技術・産業など」68名、「芸術・文化・生活・スポーツなど」の4専門分野別に71名の執筆・校閲者名が記載される。『大辞林』(初版)では、「協力者」として、「国語・国文・言語関係」97名、「人文・社会科学関係」118名、「自然科学関係」89名、「音楽・演劇・芸能・美術・工芸・建築・服飾・生活・スポーツなど」の80名の一覧を記載する。上述のように、人間科学の語釈の執筆者を推測できる幾つかの要素はあるものの、「人文・社会科学」と「自然科学」のどちらの専門分野の者なのかを含め、確かなことは不明である。さらに、『広辞苑』等の編集者であった増井(2013)、上述の倉島(2002)、飯間(2013)らは、各項目の語釈の大部分に各専門の執筆・校閲者が関与する場合においても、その文章の改変を含む最終的な責任は辞書編纂者にあるとしている。

## 5. 項目の選定

表3では、戦後刊行された中型・大型国語辞書6種の中で立項された「・科学」の語形をもつ11語(ライフサイエンスを除く)について<sup>25)</sup>、それが国語辞書の項目として採用された時期を5年ごとにまとめた。人間学、人類学、人間工学等の語だけでなく、自然科学、社会科学、精神科学、文化科学、教育科学の5語は戦前の国語辞書の中で立項される語であるが、人間科学、生命科学、行動科学の3語が国語辞書に収録されるのは1980年代以降のことである。人間科学の国語辞書収録時期は、戦後早くから国語辞書で立項された人文科学<sup>26)</sup>や労働科学の語よりも30年程遅く、また行動科学、生命科学<sup>27)</sup>の2語に比べるとやや早い傾向がみられる。

国語辞書における新規項目の選定については、現代語の用例採集と辞書編纂作業を推進した見坊(1976,1990)が、「一般性と永続性を兼ねそなえた新語」<sup>28)</sup>を採録すべきとし、その項目選定の基準等を明らかにしている。『日本国語大辞典』の編集代表であった松井(2005)は同辞書における百科項目選定の課題を指摘するが、見坊(1976)、倉島(2002)、松井(2014)らは、現代用語・時事用語・

表3 戦後の中型・大型国語辞書(項目数20万以上の6種)の人間科学及び関連語形の立項の動向(電子辞書除く)

| 項目の名称    | 1955～ | 1960～ | 1965～ | 1970～ | 1975～ | 1980～ | 1985～ | 1990～ | 1995～ | 2000～ | 2005～ | 2010～ | 2015～ |
|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 自然科学     | 広     |       |       | 日     |       | 国     | 大講    |       | 泉     |       |       |       |       |
| 社会科学     | 広     |       |       | 日     |       | 国     | 大講    |       | 泉     |       |       |       |       |
| 人文科学     | 広     |       |       | 日     |       | 国     | 大講    |       | 泉     |       |       |       |       |
| 精神科学     | 広     |       |       | 日     |       | 国     | 大講    |       | 泉     |       |       |       |       |
| 教育科学     | 広     |       |       | 日     |       | 国     | 大     |       | 泉     |       |       |       |       |
| 文化科学     | 広     |       |       |       | 日     | 国     | 大講    |       | 泉     |       |       |       |       |
| 歴史科学     | 広     |       |       |       | 日     | 国     | 大     |       | 泉     |       |       |       |       |
| 労働科学     | 広     |       |       |       | 日     | 国     | 大講    |       | 泉     |       |       |       |       |
| 人間科学     |       |       |       |       |       | 広     | 大     |       | 泉     | 日     |       |       |       |
| 行動科学     |       |       |       |       |       |       | 大     | 広     | 泉     | 日     |       |       |       |
| 生命科学     |       |       |       |       |       |       | (大)講  |       | 講広(泉) | 日     |       |       |       |
| ライフサイエンス |       |       |       |       |       | 広     | 大講    |       | 泉(講)  | (日)   |       |       | (広)   |

広：広辞苑(初版1955)(2版1969)(2補訂版1976)(3版1983)(4版1991)(5版1998)(6版2008)(7版2018)

日：日本国語大辞典(1版1972～76)(2版2000～02)

国：小学館国語大辞典(1981)

大：大辞林(初版1988)(2版1995)(3版2006)

泉：大辞泉(1版1995)(2版2012)

講：講談社日本語大辞典(初版1989)(2版1995)

※ 『講談社日本語大辞典(初版)』のみ準中型国語辞書(17万5千項目)

※ ( )は項目名のみで、語釈の記述がない項目

新語・流行語辞典や小型国語辞書とは異なり、「中型以上の国語辞典は、新語を追うことが任務ではなく、定着して使われ続ける語を載せるべき」<sup>29)</sup>と述べている。さらに、中・大型国語辞書は改訂に要する期間が長くなり、それとあわせて新語の採録や新しい意味・用法の記載が他の辞書よりも遅くなるだけでなく、語彙・用例採集の継続的実施を辞書編纂者の重要な任務であるとしている。倉島(2002)は『大辞林』(初版)の編纂時、百科項目を立項する際の選定にあたり、上記(Ⅲ.4.)の専門家に協力を求めた上で、「一般の社会生活で触れる可能性のある語、教養として知っておく必要があると考えられるやや専門的な語」等を立項したことを明らかにしている<sup>30)</sup>。

既述のように、人間科学が国語辞書で立項された時期は、1983年に改訂された『広辞苑』(第3版)刊行以降のことである。人間科学の語は、1972～76年刊の『日本国語大辞典』(初版)、1977年刊『広辞苑』(第2版補訂版)等の1970年代迄の国語辞書では立項されていないため、人間科学の語が普及・定着し、一般化したと見なされるような社会的状況は1970年代以降に顕著になっていったことがわかる。そのことは、表1・表3のみならず人間科学の名称を題名とした文献の増加状況や<sup>31)</sup>、大学の新設学部等の名称に人間科学が採用された時期等からも理解される(表4, 表5)。

表4 人間科学の組織の主な設立動向(1980年代まで)

| 年度   | 新設の組織  |
|------|--|
| 1972 | 大阪大学(人間科学部)                                    |
| 1976 | 文教大学(人間科学部)                                    |
| 1977 | 札幌学院大学(人文学部人間科学科)                              |
| 1981 | 慶應義塾大学(文学部人間関係学科人間科学専攻)                        |
| 1983 | 常盤大学(人間科学部)                                    |
| 1987 | 早稲田大学(人間科学部)                                   |
| 1989 | 東洋英和女学院大学(人文学部人間科学科)<br>東北学院大学(教養学部教養学科人間科学専攻) |

出典)長谷川(2006)を改変

※大学の名称は、設立時でなく、2019年4月時の名称

## 6. 他の項目の記述内容との関係

倉島(2002)は国語辞書編纂にあたり、「各項目はそれぞれが独立して記述されているのではなく、いくつもの項目が網の目のように関連し合っ

て書かれているから、(中略)必ず関連する項目との整合性を確認しなければならない」<sup>32)</sup>と述べている。

人間科学の項目についても、他の関連項目の記述内容との対比やそれとの関係を通して、その記述を修正し、人間科学それ自体の位置づけを明確化することが行われているようである。さらに、上述の『広辞苑』(6版・7版)における人間科学の項目の記述内容は、「人間科学」を理解する上で、「人文科学」との異同やそれとの関係を考えることが避けて通れない課題であることを示唆する。それらの点を考える一例として、ここでは、『広辞苑』における「人文科学」の項目をとりあげる。

上述のように、『広辞苑』第6版(2008)では、人間科学の項目に新たに英語対訳語(human sciences)が付加された<sup>33)</sup>。ところが、『広辞苑』では、第2版(1969年)から第5版までの約40年間に渡り、次のように、“human sciences”は「人文科学」の対訳語であった(下線は、前版の文章から変更された部分)。

人文科学(新村出編『広辞苑』岩波書店)

第2版(1969:1162), 第2版補訂版(1977:1162), 第3版(1983:1257)

(human sciences) 政治・経済・社会・歴史・文芸など、広く人類文化に関する学問の総称。狭義には、自然科学・社会科学に対して、言語・文芸・歴史などに関する学問の称。文化科学。第4版(1991:1345)

(human sciences) 政治・経済・社会・歴史・文芸など、広く人類文化に関する学問の総称。狭義には、自然科学・社会科学に対して、哲学・言語・文芸・歴史などに関する学問の称。文化科学。人文科学から哲学を区別し、これを独立に立てる考えもある。

第5版(1998:1395)

(human sciences) 政治・経済・社会・歴史・文芸など、広く文科系の学問の総称。狭義には、自然科学・社会科学に対して、哲学・言語・文芸・歴史などに関する学問の称。以下、削除。第6版(2008:1464), 第7版(2018:1525)

(humanities) 前段の文章削除。自然科学・社会科学に対して、哲学・歴史学・文学など人間

表5 「人間科学」及び「人間の科学」を題名とした翻訳図書の出版の動向

| 図書の題名 | 1950～ | 1960～ | 1970～ | 1980～ | 1990～ | 2000～ | 2010～ | 計  |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 人間科学  | 1     | 2     | 8     | 8     | 3     | 2     | 4     | 28 |
| 人間の科学 | 1     |       | 2     | 1     |       | 4     | 1     | 9  |
| 計     | 2     | 2     | 10    | 9     | 3     | 6     | 5     | 37 |

※ 国会図書館オンライン「図書」検索（2019年9月時）結果（単位：冊）

※ 「題名」は表題・副題であり、シリーズ名等を含まない

※ 「題名」は邦訳であり、原書の題名と必ずしも一致しない

※ 表の数値には、新装版等であっても内容が同じ文献は含まない

文化を研究対象とする学問の総称。人文学。文化科学。（※点線は、第7版のみ）

以上のように、“human sciences”は2008年に改訂された第6版において、「人文科学」から「人間科学」の対訳語へ変更されるとともに、人文科学の対訳語は“humanities”に変更された。“humanities”は『広辞苑』第2版以降、「人文科」の対訳語として採用されており、第6版からは「人文科」と「人文科学」の2項目の対訳語となっている。

徳永（1989）が指摘するように、フランス系の“sciences humaines”の業績が日本に紹介されるにあたり、「日本語訳では人文科学ないし人間の科学などと訳され」<sup>34)</sup>るなど、人間科学と人文科学の両概念の区別は、必ずしも明確とはいえない状況があった。「人間科学」及び「人間の科学」を題名とする翻訳図書の動向をみると（表5）、1970年代から80年代の公刊が主であることがわかる。日本で翻訳・公刊された図書の中で、題名（シリーズ名称等を除く）に初めて「人文科学」の名称を採用したフーコーの『言葉の物-人文科学の考古学-』（新潮社、渡辺一民他訳1974＝Foucault1966）の原題が“sciences humaines”であることは比較的良好に知られている。その同年に、人間科学叢書として刊行された『人間科学の諸理論』（白水社、竹内良知他訳1974＝Freund1973）は、フランス系の“sciences humaines”をわが国に直接紹介・翻訳した図書のうち、「人間の科学」ではなく、「人間科学」を題名（シリーズ名を除く）に採用した初出であるが、その本文においても、“sciences humaines”を「人文諸科学」もしくは「人文科学」と訳出している。その出版の2年後に、原著前半部の翻訳として刊行された『人間の科学と人文科学』（法律文化社、片山寿昭訳1976＝Gusdorf1967）の

本文でも同様に、“sciences humaines”を「人文諸科学」、「人文科学」とし、それと区別して“sciences de l'homme”を「人間の科学」（一部「人間科学」）と訳出する<sup>35)</sup>。国語辞書等で記述される「人文科学」の考え方は異なる「人間科学」への理解が拡がりをみせるようになる一方で、戦後の人文学または人文科学と人間科学の混同や両者の関係をめぐる混沌とした状況を反映した記述の例として、ここでは専門語辞書における高島善哉の次の記述を紹介する<sup>36)</sup>。

人文科学 [human science] (高島善哉監(1980)

『社会科学小辞典』春秋社, p.164.)

自然科学や社会科学とならぶ科学分類の一つで、主として人間の意識・心理ならびにその表現としての文化領域全般を対象とする学問。具体的には哲学、倫理学、心理学、文学、歴史学、人文地理学、考古学など人間の精神的文化的現象を対象とした学問が含まれるが、生理学をとり入れた心理学や社会心理学、社会学など、他の自然科学や社会科学との区別を明確化しがたい学問もある。(高島善哉)

## 7. 百科項目の記述内容

既述のように、中型・大型国語辞書は、国語項目と百科項目から構成される総合辞書としての特性を持つ。国語項目と百科項目の記述内容の違いについては、国語辞書と百科事典の解説の違いについての見解が参考となる。例えば、見坊（1977）は「国語辞書はことばの解釈、百科事典はものごとの解説」<sup>37)</sup>として、松井（2005）安田（2006）らは「国語辞典は言葉を説明し、百科事典は事柄を説明する」<sup>38)</sup>と述べるなど、一般に、言葉を意味として扱う国語項目と、知識や情報等を提供する百

科項目との記述内容の違いとして指摘されている。他方で、倉島(2002)は、国語辞書に載せる百科項目の記述には限界があり、「百科事典ほどのスペースを割くことはできない」ため、国語辞書は「百科事典や専門語辞典までの橋渡しができればいい」<sup>39)</sup>と述べている。

人間科学の関連語形(表3)の各項目の記述内容をみると、精神科学、文化科学、歴史科学のように、研究の視点や方法・対象等だけでなく、当該研究の創始者・代表者等を簡潔に記述・説明する項目がある一方で、人間科学や教育科学、労働科学の語のように、その淵源や研究系譜等の知識や情報には全くふれない項目がある。「人間科学」の語積については、上述のように、「人文科学」等との関連による説明とともに、「人間」と「科学」の2つの語義の組み合わせに基づく一般的、慣用的な記述的説明を行っていることがわかる。その記述の背景には、フランス系の“sciences de l’homme”, “sciences humaines”の系譜や1930年代からのアメリカの“science of men”の構想のみならず、人間科学及び人間の科学と呼ばれる研究や構想に断絶・変遷の歴史があることに加え、その考え方・捉え方の基盤は多様であり、それらが従来の人文(科)学等の学問体系そのものをリニューアルしようとする動向の中で表現されてきたこと(徳永1989)、さらに、それがあべき学問のあり方を求める理念と結びつき、「人間」と「科学」という人間的事象にかかわるあらゆる研究領域に開かれていたことも、多様な諸学からの人間科学への参入を招いた要因として見逃すことができない(丸山1985, 堀口2019)。そうした人間科学の名称をめぐる複雑で多様な状況や系譜等の記述を国語辞書の限られた語積の枠内に求めることは、あまりに困難な課題であるといえるのかもしれない。

## 注

- 1) 本稿の数値は、国立国会図書館検索・申込オンラインサービス(本稿では、「国会図書館オンライン」とする)による検索時点(日付記載が未記入の場合、2018年3月時)の結果である。表1では、『質的心理学辞典』(能智正博編代表2019, 新曜社)で立項された新たな人間科学の文章など、2018年4月以降に刊行された辞書は含まれない。前著(堀口2019)の表1では、「国語辞書」等の数値の一部に重大な誤記があった。本稿の表1は、百科事典と国語辞書の区別の不明確さ(本論で詳述)から国語辞書等に集計した前著の数値を、あらためて前回述べた原則に基づき再集計したものである。
- 2) 飛田良文(2002)『明治生まれの日本語』淡校社 p.202.
- 3) 国語辞書における「自然科学」の立項の初出としては(国会図書館オンラインに基づく東京本館所蔵図書を対象, 以下同じ)、1907(明治40)年刊の『辞林』(金澤庄三郎編, 三省堂, p.642.)が早く、同書には、「精神科学」の語も立項されている。
- 4) 国語辞書における「社会科学」の立項の初出は、1915(大正4)年刊の『大日本国語辞典』(松井簡治他編, 富山房)であり、同書には、「文化科学」も立項されている。
- 5) 加茂正一(1955)「新語」, 国語学会『国語学辞典』編集委員会編『国語学辞典』東京堂 p.556.
- 6) 榎垣実(1956)「新語」, 石黒修他編『ことばの講座第2巻 これからの日本語』東京創元社 p.157.
- 7) 日本国語学会編(2018)『日本国語大辞典』東京堂出版 p.543.
- 8) 沖森卓也編(2008)『図説日本の辞書』おうふう p.124.
- 9) 見坊豪紀(1961)「辞書の姿」古田晁編『言語生活』第114号 筑摩書房 p.17.
- 10) 宮地他監(2013)によれば、近年は、新たな慣用を取り込んだ言葉の現状をあるがままに捉えて記述する方針の国語辞書が増えているという。



- 11) 日本における人間科学の受容・変容の問題を指摘した論考に、奥谷浩一（1997）「人間科学の系譜と方法の問題」（札幌学院大学『人文学会紀要』第60号 pp.71-91.）がある。
- 12) 今野真二（2014）『辞書をよむ』平凡社 p.21.
- 13) 遠藤嘉基他編（1958）『コトバと論理』中山書店 p.55.
- 14) 『辞林21』には表題が異なる『辞林「机上版」』（1993）もあるが、「机上版」、「大型版」、「縮刷版」等については、出版年が同年であり内容も同じであるため、ここではとりあげていない。
- 15) 『新明解百科語辞典』（三省堂編1991）は、『大辞林』の中から専門語や多分野に渡る知識・事柄等を集めた百科語辞典（収録語数5万2千語）として刊行された。
- 16) 20世紀の終わり頃から実用化され急速に普及した電子辞書・オンライン辞書については、現代社会においてそれが書籍辞書にとって代わったわけではなく、電子辞書の各項目の文章は、近年の新語等を除き、書籍辞書の項目の文章に基づいている。本論では、書籍辞書を対象としており（堀口2019）、そこでの語釈と異なる文章が電子辞書にみられない限り、電子辞書はとりあげていない。
- 17) 松村明監（2012）『大辞泉』第2版（小学館,p.2773.）では、第1版及び増補・新装版の「かわる」という平仮名表記が漢字表記の「関わる」に変更されている。しかし、本論では、前回（堀口2019）示した原則に則り、同一文章扱いとした。
- 18) 倉島節尚（2002）『辞書と日本語 国語辞典を解剖する』光文社新書 pp.95～96.
- 19) この4分類は、21世紀初頭迄の書籍中心の時代において該当し、現在の電子辞書においても概ね該当する基準として設定した。しかし、近年の電子辞書の特徴は、新語等のインターネット上の更新スピードにある。例えば、2006年にデータベースによる常時改訂システムを実現した『大辞泉』（『デジタル大辞泉』）は、年3回の更新により30万5,084語（2019年8月11日検索時,daijisen.jp/digital/）を採録するなど、従来の書籍辞書の枠組とは異なる動向がみられるようになっている。
- 20) 新村出編（1955）『広辞苑』第1版 岩波書店 p.5.
- 21) 原田奈扇雄編（1971）『言語生活』No.235 筑摩書房 p.20,pp.32-42.
- 22) 国立国語研究所（2009）『辞書を知る 新「ことば」シリーズ22』p.30. ぎょうせい
- 23) 松井栄一（2002）『出逢った日本語・50万語辞書作り三代の軌跡』小学館 p.111-112.
- 24) 鎮目恭夫（1958）「生命の科学と人間の科学」『世界』145 岩波書店 pp.133-137.  
小原秀雄, 鎮目恭夫（1971）「なぜ人間の科学か 問わぬ科学を問う科学」『SD：space design：スペースデザイン』75 pp.31-42.
- 25) 例えば『広辞苑』（第7版）では、そのほか環境科学、情報科学、地球科学の語を立項するが、表2では、人間科学に関連する度合いが比較的高いと考えられる用語を選定した。
- 26) 国語辞書で「人文科学」の語が立項された初出は、1949年刊『言林』（新村出編, 全国書房）である。
- 27) 国語辞書における生命科学の立項は、『大辞林』初版（1988）が早い。『広辞苑』以外の中型・大型辞書5種においては、当初から「生命科学」と「ライフサイエンス」の両方を項目で立てていたが、その語釈は「ライフサイエンス」のみに与えていた（表3）。しかし、「生命科学」の最初の語釈が行われた1995年以降は、中型・大型辞書5種中3種は「ライフサイエンス」を見出し項目のみに変更するとともに、「生命科学」だけに語釈を与えるようになっている。
- 28) 見坊豪紀（1976）『辞書をつくる 現代の日本語』玉川大学出版部 p.47.
- 29) 倉島節尚（2002）前掲書 p.118.
- 30) 倉島節尚（2002）同上 p.127.
- 31) 人間科学を題名とする図書を発行年代別にみると（国会図書館オンライン2019年8月検索時）、1940年代1冊、1950年代3冊、1960年代7冊であったが、1970年代は14冊に増加するとともに、シリーズ名に人間科学を初めて用いた『人間科学叢書』（誠信書房, 1971～79）6部（※上下2冊を1部に換算）が刊行されている。さ

- らに1980年代当初では、同じくシリーズ刊行として、1980年『人間科学の統計学』（朝倉書店）、1981年『人間科学叢書』（刀水書房）、1982年『講座看護の人間科学』（垣内出版）の3シリーズの刊行が始まるなど、人間科学の名称を採用した図書数の増加は、1970年代以降に顕著となっている。尚、上記の図書のうち、翻訳書については、表5及び注36を参照のこと。
- 32) 倉島節尚(2002)前掲書 p.105.
- 33) 『広辞苑』を除く他の中型・大型国語辞書5種の項目では、人間科学および人文科学の英語等の対訳語は記載されていない。
- 34) 徳永恂(1989)人間科学とは何だろうかーゆらぎの中での自己反省と自己組織化ー大阪大学人間科学部『大阪大学人間科学部紀要』第15巻 p.7.
- 35) 訳者自身、同書の「あとがき」の中で、訳出に困難さがあったこと、また「人間の科学」と「人文科学」の原語・訳語には相反する用例がみられることを述べている。例えば、わが国でフランスの“sciences humaines”の業績を図書として翻訳・紹介した初出の『人間の科学と哲学』（岩波新書、清水幾太郎、川俣晃自訳1959=Goldmann1952）では、“sciences humaines”を「人間科学」もしくは「人間の科学」と訳している。
- 36) 『大学事典』（児玉善仁編代表2018、平凡社 p.532）など、人文科学の英語対訳を“human sciences”とする例は、近年の辞書においても散見される。
- 37) 見坊豪紀(1976)『辞書と日本語』玉川大学出版部 p.77.
- 38) 松井栄一(2005)『国語辞典はこうして作る理想の辞書をめざして』新宿書房 p.102.
- 39) 倉島節尚(2002)前掲書 p.161.
- Freund, J. (1973) „Les théories des sciences humaines”, 1.éd., Paris, Presses Universitaires de France, pp.1-161.
- Goldmann, L. (1952) „SCIENCES HUMAINES ET PHILOSOPHIE”, Paris, Presses Universitaires de France, pp.1-145.
- Gusdorf, G. (1967) „LES SCIENCES DE L'HOMME SONT DES SCIENCES HUMAINES”, Publications de la Faculté des lettres de l'Université de Strasbourg, Paris, Belles lettres, pp.1-294.
- 長谷川幸一(2006)『人間諸科学の形成と制度化ー社会諸科学との比較研究ー』東信堂 p.169.
- 堀口久五郎(2019)「辞書にみる人間科学(1)ー序論ー」文教大学人間科学部『人間科学紀要』第39号 pp.89-97.
- 飯間浩明(2013)『辞書を編む』光文社新書 p.141. p.150.
- 見坊豪紀(1990)『日本語の用例採集法』南雲堂 pp.1-408.
- 松井栄一(2014)『日本人の知らない日本一の国語辞典』小学館 pp.1-191.
- 増井元(2013)『辞書の仕事』岩波新書 p.152.
- 丸山高司(1985)『人間科学の方法論争』勁草書房 pp.1-240.
- 宮地裕他監(2013)『日本語学』第32巻第2号 明治書院 p.31
- 安田尚道(2006)「国語辞典における百科語の諸問題」(倉島節尚編『日本語辞書学の構築』おうふう pp.491-502.)

## 文献(本文及び注で明記しないものを掲載)

Foucault, M. (1966) „Les mots et les choses. Une archéologie des sciences humaines”, Paris, Editions Gallimard, pp.1-400.